

# 総ぐるみ「新聞」

## NPO総ぐるみ福祉の会 第一回会員座談会

### 終戦の日(昭和二十年八月十五日)の私

当会が、今年の活動目標の一つにあげている座談会形式の第一回交流会を、表記テーマで、去る八月十五日の終戦記念の日に、日限山荘で開きました。

今回は、浅井すみ子様、碓井助吉様、平島不二夫様の三人から、それぞれお話を聞きましたので、紹介します。

**浅井** 当時、私は二十七歳で弘明寺に住んでおり、六歳と三歳の子供がいました。主人は兵隊検査に不合格で、当時は綱島のほうの工場に徴用にとられていました。

東京大空襲は三月十日でしたが、横浜は、五月二十九日の午前中から何編隊もの爆撃機におそわれ、横浜の中心街は真っ黒な煙に包まれ、次々に落とされる焼夷弾や照明弾が、弘明寺からは花火の様にきれいに眺められました。この空襲によって、阪東橋以北の横浜は焼け野原になったのです。

主人の父が、伊勢佐木町五丁目糸綿を商う店をやっていたので、夕方、空襲がおさまってから、子供を置いて自転車で乗って伊勢佐木町まで行きましたが、途中には

NPO総ぐるみ福祉の会・事務所は  
日限山4・44・23（八四四一七四七七）の宮崎宅です。  
入会や活動についてのお問い合わせは  
事務所または「日限山荘」日限山4・7・1へお願いします。

焼死体があるが、子供を抱いた母親の水ぶくれ状態の死体などがあって、自転車を持ち上げなくては通れないひどい状態でした。主人の実家は、四十数発の焼夷弾が落ちて丸焼けでしたが、義父は商用で出かけていて無事でした。帰りに川のそばを通ると、川には死体が多く浮いていました。焼け残った弘明寺の家は、空襲で焼け出された親戚が頼ってきて、短期間ですが三十数人暮らしました。

この空襲後、母の妹を頼って浜松の郊外へ疎開しました。この浜松では、三方が原飛行場に航空隊がいたので、艦砲射撃や艦載機による機銃掃射も経験しました。

八月十五日は、兵隊さんの食事作りの仕事に徴用された先で終戦の詔勅を聞きましたが、兵隊達が短剣をはずして足で踏みつけ、泣いて悔しがっていました。私は、戦争が終わってよかったという思いと、先行きの不安があつて、複雑でした。その後進駐軍がきて、女性を襲うと言ううわさが広まり、山のほうの親戚に身を寄せましたが、これはうわさでしかなく、一年ほどの疎開

を終えて、弘明寺の家に帰ってきました。戻ってからは、食糧難で苦労しました。闇市でりんご1個を買うために2時間並んだり、子供を背負って買出しに行ったり、子供に食べさせるために必死でした。

徴用の主人は終戦後すぐ帰ってきましたが、主人と二人の子供が川崎の兄の所へ遊びに行った帰りに、進駐軍のジープにはねられて長男が大怪我をし、溝ノ口の病院に長く入院するという不幸にもあいました。戦争だけは、もう二度としてほしくないと、強く思います。

私は、出来る時には人のために出来るだけのことをするという主義で、今日まで大病もせずにやってこられました。

**碓井** 終戦当時私は三十三歳、すでに二人の女の子の父親で、川崎の海岸寄りに住んでいました。軍事工場の池貝自動車に勤務して戦車を作っていたのですが、終戦の一年前の昭和十九年に兵隊にとられ、朝鮮に出征しました。

朝鮮の釜山に上陸後は、光州まで昼夜通して丸二日間歩きとおす強行軍の移動で、身体の弱い人はばたばた倒れる中、友人の背囊と銃を三人分背負って行軍することが出来たのは、若い頃から実家の農業を手伝い、父親から「若い内に身体を鍛えておけ

よ」といわれた賜物で、親に感謝しました。朝鮮の軍隊では戦闘はなく、上官にも恵まれて殴られもせず、楽な軍隊生活でした。幸運にも三ヵ月後、十九年十月に仲間二人と内地に帰され、再び池貝に戻りましたが、戦車を作る材料がもうない状態でした。終戦の詔勅は、実家の庭で聞きましたが、戦争に負けた事が残念でした。

自宅は、川崎一円の空襲による焼夷弾で焼けましたが、幸いお大師さん前の実家や家作は焼け残ったので、その家作で暮らしました。自宅の焼け跡には、早速かぼちゃを植えて食料の足しにしました。また、自宅に食堂勤務の女性を預かっていたので、その人の配給をわが家にもらうことが出来て、食料では苦勞をしないですみました。戦後は、池貝自動車も、鉦や鎌・リヤカーなどを作っていました。程なくアメリカ軍の戦車の修理を引き受けるようになり、その車輪のあまりの大きさに、日本軍は負けるはずだと思つたものです。

その後、近所でガソリン製造の仕事をし、その仕事もダメになったので、千葉県の関宿に移って、ナフテン製造工場の立ち上げに関わり、定年まで勤務しました。

長生きは寿命ですが、身体を動かし、働きた者であったことが、今日の私となつたと思つています。

**平島** 終戦当時は二十六歳、ソ連と満州の国境近くに駐留する関東軍の小隊長でした。この部隊は、現地の召集兵ばかりで銃の

取り扱いも下手でした。

私は九州八女の生まれですが、宇都宮農業専門学校で農業政策を専攻し、農林省の国家公務員で霞ヶ関に勤務していました。その後、満州に転勤となって、新京からハルピンで勤務していて、現地召集となつたのです。私は、若い頃から射撃が上手だったため、軽機関銃を持たされていました。終戦直前に、ハイラルの川のほとりの陣地でソ連軍の侵攻に遭遇し、ほとんど戦闘もないまま降伏しました。

降伏後は、川向こうのソ連の陣地に日本の軍隊組織のまま抑留され、一週間から十日もすると、日常会話程度なら、ロシア語もわかる様になりました。程なく終戦となり、数ヶ月後には貨物列車に詰め込まれて、シベリヤへ送られ、石炭掘りをやらされました。

食料は、黒パン・とうもろこし・じゃが芋などが配給されましたが、量が足りないで、ソ連兵が欲しがる万年筆や時計と食べ物と交換してしまいましたが、一ヵ月もすると、日本風な味付けをした煮物などが、食事時に出るようになってきました。

最初の三ヶ月の間に、疲労や病気で倒れる人が大勢ありました。

怪我をしたり、病気になるたりすると、じゃが芋掘りやとうもろこしの採取などの農作業をやらされました。

シベリヤの冬の寒さは厳しいものでしたが、石炭を掘る作業場の地下は温かく、また、収容所は回りを板囲いし、仕事帰りに

石炭を持ち帰ってストーブで燃したので、暖かく過ごせました。

シベリヤへ来て一年半たった昭和二十二年に、ナホトカから船に乗り、京都の舞鶴港へ帰ることが出来ました。抑留は、戦争に負けたから仕方がないと思つていました。帰国後は農林省へ戻り、金沢、熊本、京都などを転勤して、最後は霞ヶ関でした。

この歳になると、人に気兼ねせず、自分の思い通りに生きようと思つていますが、それが長生きの秘訣でしょう。

\* \* \*

今回は会場の関係から、当会の役員やサポーターの一部が聞き手として参加しました。今後は、今回の経験に基づいて、年数回、多くの方が交替で参加できる、座談会形式の交流会を開催する予定です。

### 【転倒予防体操にご参加下さい】

#### ○日限山荘で行う健康体操

日時：9月5日(火)、19日(火)、29日(金)  
場所：日限山荘 午前10時半～11時半  
講師：小高典子さん

#### ○第四回 転倒骨折予防体操

(ひざり地区社会福祉協議会と共催)  
日時：9月9日(土) 午前11時～12時  
場所：西洗・港南プラザ自治会館  
講師：石川久野さん、利根川和代さん

日限山荘で食事づくりをしてくださるボランティアの方を募集しています。